第145回実践勉強会　実施レポート

共催　大田区薬剤師会・キッセイ薬品工業株式会社

参加者94名

日時：2022 年 8 月 9 日(火)19:45～21:15

形態：Zoom　Meeting

『　潰瘍性大腸炎の臨床と治療　』

東京蒲田医療センター消火器内科　新井典岳　先生

質疑応答

質問：5-ASA 製剤の高用量維持に関して、1～2 年維持するにあたって患者負担が高くなるが、昨今のジェネリック供給不足が治療に影響することがあるか。

回答：現状影響はしていない。患者は費用的に気にされることが多いので、減量・薬剤変更することもある。しかし悪くなることがあるので説明・納得が必要。

質問：エンタイビオの効果発現までに 1 年ほどかかるとの報告もあったが、高価な製剤をあまり効果実感できない中で継続するために患者への説明で工夫されている点はあるか。

回答：ゆっくり効くという製剤（重症には効かず中等症が良い適応と考える）、効果を実感するのに 1 年間かかるという報告があるという程度の説明は行っているが、大事なのは継続するかの見極めである。

3・4回目の投与あたりで少しでも効果が感じられるようであれば待っても良い、副作用も少ないので待てる方には待ってみましょうねと説明することはある。重症度も含めての判断になるかと思われる。

質問：潰瘍性大腸炎の患者は大腸がんのリスクが高いというのは、病気が強い炎症を伴うが故のものなのか。
回答：炎症由来の発がんは考えられる。炎症が遷延しているような症例、CRP などのマーカーは正常でも、内視鏡でみると少しの炎症が残っているような場合は、野放しにすると発がんのリスクは上がると考える。

文責：キッセイ薬品工業株式会社 岩井・牛山